

公演御礼

「第九回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演」に、私ども相模里神楽垣澤社中をお招きいただきまして、まことにありがとうございました。ご来場いただきました埼玉県民の皆様、加えて厚木市から応援に駆けつけてくださった皆様に深く感謝しているところです。

三代、100年で築き上げてきた相模里神楽の伝統がさいたま芸術劇場という離れた場所で通用するのか、心配ばかりしながらの公演でしたが幸い、温かい拍手も頂戴でき、ホッとした気分で神楽衣装の陰干し、大道具、小道具の整理を行っております。

神社祭礼時での公演を主に行ってきた私どもにとって、このような素晴らしい劇場での舞台公演は、今まで経験したことがありませんでした。すべては初めての経験ばかりで、全く未知の世界への挑戦でした。

一つは、主催側と濃密なコミュニケーションを重ねながら公演趣旨と演目を練り上げたこと。昼と夕の二本立て公演であり、出演団体が私どもだけ、という構成。三番目は神楽の未来を見据えるように、新作神楽を要請されたことです。

いずれも消耗を強いられる内容で、伝えられてきた神楽をただ消費する公演でなく、創造的な神楽公演でした。この公演準備にかけた時間は膨大で、私たちが自明としてきた神楽芸の見直し、洗いなおし、魅力の再発見などあり、私ども社中活動の総決算を行ったような感じでした。

私たちの神楽芸には先祖の芸があり、当代になってからの芸があり、これからの神楽を模索する新しい芸があります。相模という大きな文化圏に根を張ってきた〈相模の神楽芸〉ですから、相模を脱出することはできず、さりとて相模に埋没することも避けなくてははいけない。「相模流とは何なのか」「垣澤社中とは何なのか」そのようなことを考えながら、家元としての責務をあらためて感じさせてもらいました。実に、刺激的な神楽公演でありました。

伝統芸は、つねに創造的でなくてははいけない。社中の仲間とあれこれと悩んだ時間がありましたが、悩みながらの稽古が〈明日の神楽〉に向かう伝承力になることを実感した次第です。外部からの提案を取捨選択、結局は相模らしく落ち着くのですから、不思議です。いい経験でした。

最後になりますが、この公演開催にあたって、厚木市長様をはじめ、湘北短期大学長様などからプログラムに玉稿を頂戴するなど、あらためて相模の温か

さを感じることができ、感激しているところです。

手にした公演解説プログラムも、私ども神楽社中の「声」がたくさん収録されており、社中の記念誌みたいな雰囲気。公演終了後に心配をかけた先代、先々代の前にお供えしました。

制作して下さった実行委員会の皆さま並びに斉藤修平様のご厚意、胸いっぱい広がる感動です。

最後に、相模里神楽垣澤社中の神楽公演に対して応援して下さった全ての皆様に対して、あらためて、深く感謝申し上げます。

2016年9月15日

相模里神楽 垣澤社中

家元 垣澤 勉